



礎石と礎石建物跡 (SB02) 42トレンチ

昨年度見つかった大型礎石建物跡 (SB01) の北側に当たります。明確な根石は見つかりませんでしたが、SB01と同じように、動かされた礎石が確認できたことから、建物があった場所とわかりました。

南側の礎石は、元の場所から低い東へ転がされたと思われます。

SB02もSB01と同様に総柱の建物と考えられ、穀類を納めた正倉であったと思われます。



正倉院の中を走る埋没谷 56~45~44~46トレンチ

調査区内に幅7~8mの浅い谷が埋没していることがわかりました。正倉はこの谷を避けて高台につくられていました。正倉院の中は平坦に造成するのが一般的ですが、多胡碑の時代（奈良時代）には起伏のある地形に正倉が並んでいたようです。

右の写真は、西暦1108年（平安時代末）、浅間山が噴火した時に谷をおった軽石を取り除いた様子です。



建物部材の石が投げ込まれた場所 46トレンチ

埋没谷の中に、人頭大ほどの多量の石が見つかりました。一緒に多胡碑の時代（奈良時代）の瓦も見つかっています。

また、平安時代の末（1108年）に浅間山が噴火した火山灰の下の地層から、粉を付けたままの米が少量ですが見つかりました。

これらのことから、46トレンチのすぐ南にある高台に、米を備蓄する正倉があったことが想定されます。



調査成果のまとめ

岡地区における3年間の調査で
次のことがわかりました。

- ①大型の礎石建物跡(SB01)を確認し、倉庫跡(正倉)と考えられる。
- ②SB01の北側に動かされた礎石が存在し、同様の建物(SB02)があったと考えられる。
- ③正倉が南北方向に配列され、他にも複数の建物が存在した痕跡がある。
- ④炭化米が出土し、米を備蓄していたことが想定される。
- ⑤西側区画溝が正倉院を区画していたと考えられる。
- ⑥上記の遺構は一体であり、規模の大きな正倉院を構成している。

以上の事から
岡地区が多胡碑と同じ時代(奈良時代)の
正倉院であると推定することができました

郡衙との関連

正倉院は郡衙を構成する主要施設であり、郡衙遺跡の一部が確認できたと認識できます。しかし郡衙を構成する他の要素(郡庁、館、厨)が確認されてから、より確実に郡衙遺跡といえることができるでしょう。今後、更なる調査を進めていく予定です。

遺跡の特徴

- ①多胡郡は新規の郡であり、新設された正倉の在り方を示しています。旧来から続く他の郡衙遺跡、正倉と比較できる重要な遺跡です。
- ②群馬県内で瓦を伴う正倉の事例は無く、国内でも稀です。多胡郡の特色を知る好資料となります。
- ③正倉院内に谷が走っており、地形の起伏を整地する一般的な正倉院の立地と比較して特異な様相です。



大型の礎石建物(SB01) 正倉と考えられる
平成25年度調査



46トレンチで出土した炭化米



27トレンチの西側区画溝
平成25年度調査

平成26年11月16日(日)

多胡碑周辺遺跡 第4次調査(平成26年度)

現地説明会

現在、高崎市教育委員会では、吉井町池地内において、多胡碑に関連のある遺跡の発掘調査を行っています。この発掘調査は、以前から多胡碑の周辺に推定されている古代多胡郡の役所(郡衙：ぐんが)および関連遺跡の場所を明らかにすることが目的です。

4年目にあたる今回の調査は、多胡碑から真南の岡地区を24、25年度につづいて調査しました。昨年度確認した大型礎石建物の北に2番目の建物の存在が推定できたこと、炭化米の発見等から、この場所が多胡碑と同じ時代(奈良時代)の正倉院(倉庫群)であったことがわかりました。



岡地区より多胡碑方面を望む(昨年度調査より)

多胡碑周辺遺跡 第4次調査(平成26年度) 現地説明会資料
平成26年11月16日 発行 高崎市教育委員会文化財保護課

高崎市教育委員会